



朝顔は「道楽」です。

朝顔のもう一つの顔

夏休みの朝、何色の花が咲くか、いつ咲くかと、ワクワクしながら観察した人も多いだろう。朝顔は青や赤のきれいな花が咲くわりに、丈夫で育てやすいので、今も昔も小学校の教材として育てられてきた。

その一方で、朝顔には粋な大人の世界がある。「大輪朝顔」と「変化朝顔」がそれだ。日本には、朝顔を芸術的なまでに美しく育て上げる人たちがいる。

愛されてきた朝顔

ここで、朝顔栽培の歴史について触れておこう。朝顔は、奈良時代に中国（唐）から伝えられ、当時は小振りの青い花を咲かせていたとされている。下剤として利用されていたが、その後は貴族の観賞用としても普及した。日本で好まれたのは、花の命がわずか半日であり、儂さを感じさせるところが日本人の性格に合っていたからかもしれない。

江戸時代に入ると、朝顔は広

く庶民にも好まれた。文化・文政の頃から、様々な色や形、模様の花を咲かせる「変化朝顔」が流行。大きな花を咲かせる「大輪朝顔」も変化朝顔の一つとして人気を集めた。当時の大輪は一五センチほどだったといわれる。ちなみに当時の朝顔の種は高額で、下級武士にとってはちょっとしたサイドビジネスにもなったらしい。

世情が安定し、世の中が平和になると朝顔熱は高まるようになり、明治時代後期にも朝顔ブームを迎える。各地に朝顔会が誕生し、東京入谷・鬼子母神の朝顔市がはじまったのもこの頃。

昭和に入り、戦争によって朝顔栽培は衰退したが、研究者や愛好家の手によって、変化朝顔、大輪朝顔の復興が行われ、今では二五センチを超える大輪朝顔が咲くまでに進化している。

道楽ですから

「朝顔は商売じゃなくて道楽ですからねえ」

肉厚の手で小さな素焼きの鉢を愛でながら、雨間秀浩さんは

照れ隠しに笑う。

明治四〇年発足というから、今年で一〇一年の歴史をもつ東京朝顔研究会。現在、九代目の会長を務めるのが雨間さんだ。

子どもの頃から花好きで、朝顔栽培のキャリアは三〇年以上になる大輪朝顔づくりの名人。東京の下町、向島生まれの江戸っ子で、普段は老舗の米屋さん。自宅の屋上には朝顔を育てるための「作り場」があり、丹精込めて育てた朝顔の鉢がずらりと並ぶ。

定型の美

古式ゆかしい朝顔の花を咲かせるためには、商売でやる花屋や、成果が求められる研究者ではなく、純粹に朝顔を突き詰める趣味の世界でなければ実現し得ないということなのだろう。

雨間さんたちにとって、朝顔をただ咲かせることが目的ではない。種子の中にひっそりと隠れている個性を最大限引き出し、育てること。手を加え過ぎず、見放さず。「葉小花大」で、なおかつ容姿端麗である美しい大

